かずさの博物誌

ヒバリ

～春の訪れのサイン～

文・写真／成田篤彦

2014.4.20

今月、木更津市の海岸沿いの草地に行った。

チガヤが地面を一面に覆い、所々にタンポポが咲き、スギナが生えていた。付近の屋敷林にはサクラが咲いていた。

青空から、「ピィ、ピィ、ピィ、ピィ」と激しいヒバリの鳴き声が数か所から聞こえてきた。

「どこにいるのか？」と見上げると黒い点が見えた。

「あんなに高いところで鳴いているのか？」とびっくりした。

少しづつ、降りて来たので、よく見えるようになった。

幅の広いつばさをいっぱいに広げ、激しく羽ばたいていた。首を右や左にまげ、口を大きく広げて鳴いている。大きな眼が飛び出て見える。飛びながら、なぜ、あんなに激しく鳴けるのか？息が苦しくないのか？不思議に思えてくる。

▲ヒバリがさえずる草地＝2014年4月10日　木更津市

空中で一点に留まって鳴くのはなわばりを守り、雌を得るためだが、それにしてもよく頑張るものだと感心する。

しばらく待っていると、草地を囲むフェンスの上に止まり、さえずり始めた。驚かさないようにそっと近づいた。頭の毛を逆立て口を大きく開け、懸命に鳴いている。

「これほど近づくと普通は逃げるのだが？」と思ったが、雄があちこちで鳴いていて、雌の獲得競争が激しいので、私から逃げるのを我慢していたのかもしれない。

さて、一九七〇年代には房総南部にはヒバリがほとんど見つからないと言われていた。現在でも県内では北部に多く、南部ではとても少ない。

上総では一九七〇年代でも小櫃川流域の畑地にはヒバリが春にさえずり、ススキの枯れ葉の間に越冬していた。今でも広い畑地や草地などで見られるが、数はそれほど多くない。この冬には台地や平地の農耕地で数羽の群れで農道にへばりつくように伏せながら、餌を採っている姿をしばしば見た。体色はスズメに似た色だが、さらに淡く、地面や周りの草の色に溶け込み、草の間から見えるヒバリの姿は動かなければ気付かない。ヒバリが鳴くのは二～六月の間である。巣は鳴いている付近の原っぱや畑などの雑草や作物の根元に作る。地上で昆虫や草の種子を食べる。

ところで、俳句や歌にヒバリほどうたわれる鳥は少ない。わが国だけでなく、イギリスでもヒバリの詩には名詩が多いと言う。また、ヒバリの俳句の多さには驚かされる。

そのわけは、上空にヒバリが高く舞い、激しくさえずることが、暖かく過ごしやすい春の訪れのサインのように思え、人々の気持ちも生き生きとするからか？と思ったりする。それにしても近頃はヒバリに関心がない方が多くなったのが残念である。

▲上空でさえずるヒバリ＝2014年4月10日　木更津市

▲フェンスの上でさえずるヒバリ＝2014年4月10日　木更津市

▲チガヤ草原でのヒバリ雄＝2014年4月10日　木更津市

memo

ヒバリ

スズメ目ヒバリ科

ヨーロッパからカムチャッカ半島にかけてのユーラシア大陸に広く分布。市街地化や耕作放棄され、草地や畑地が減少し、生息地が失われつつある。そのため、減少が続いていて、県の一般保護生物に指定されている。

参考文献…千葉県の保護上重要な野生生物二〇一一年　千葉県

◎写真・文章の無断転載を禁じます。